

大阪市立大学生活科学部紀要・第49巻（2001）

青年期後期における孤独感の発達に関する一考察

— 自我同一性の視点から —

後藤佳代子・松島恭子

The examination about the development of Loneliness in late Adolescence.

—from the viewpoint of identity—

Kayoko Goto and Kyoko Matsushima

問題と目的

1. 先行研究

青年期は「心理的離乳の時期」(Hollingsworth,1928)といわれ、親や家族からの依存を脱し、独立していく時期である。加えて「目を自己の内面の世界に向け、主観をこの世の他の全てのものから、いわば鳥のように離れた1つの独自の世界として発見するようになる」(Spranger, 1924) 自我の発見の時期といわれる。この時期の孤独感は避けえないものであり、孤独感は青年期の「基本的生活感情」(落合, 1985)といわれるゆえんである。

一般的に孤独感という感情は、「苦しい」「寂しい」と、否定的なイメージを抱く人が多いと考えられる。従来の孤独感の研究においても、「人間への親密さ、対人関係への親密さの要求が十分満たされないことに関わる過度の不快感を伴った衝動体験である」(Sullivan,1953)、あるいは「個人の実際の対人関係と望んでいる対人関係のずれを不快、ないしは不満と感じる経験である」(de Jong-Gierveld,1978)と定義づけられてきた。孤独感の定義を多く概観したPerlman & Peplau (1982)は「①孤独感は個人の社会的関係の欠如に起因する。②主観的な体験であり、客観的な社会的孤立と同じ意味ではない。③不快であり苦痛を伴う」という3つの点での一致を見えており、孤独感の否定的な面を取り上げていると考えられている。

その一方で孤独感の肯定的な側面を表わした心理学的知見も見られる。Storr (1988)は、Winnicott (1958)のいう「独りでいられる能力」の概念をもちいて次のように述べている。「独りでいられる能力の発達は、脳がその最良の状態を機能するためにも、個人が最高の可能性を実現するためにも必要なことであるのは明らか

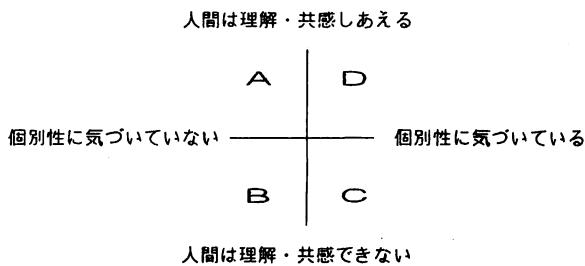
とである。人間は、容易に、自分自身の最深部にある要求や感情から疎外されるようになる。学習や思考や革新や自分の内的世界との接触を維持することは、すべて孤独によって促進されるのである」。また、Moustakas (1961)は、「孤独が人間生活の条件であり、また、孤独は人に人間性を保持させ、広げさせ、深めさせる人間たる経験である」と述べている。また、孤独感を、孤独不安と実存的孤独に分類している。そして前者は「漠然とした、かき乱すような不安としてある自己疎外、自己拒否の孤独」であり、後者は「真実の体験の中において避けることのできない本当の孤独で」あり、「真実の自己意識を保持していれば、孤立は励ましとなり、より深い感受性と意識性を導きだし、想像力の源となっていくものである」と述べている。

以上のように孤独感の否定的あるいは肯定的な側面という一面から捉えた研究とは別に、孤独感がこれらの両面を含むものであるという観点から検討した研究もある(落合, 1983)。落合 (1976)は、まず孤独感の規定因構造を解明するためにオリジナルの文章完成法を用いた。解答分析の結果、次の2要因が示唆された。要因1「人間同志の理解・共感は可能であるか否かという、1つの感じ方」、要因2「孤独(自己の存在の仕方)への目のむけ方」である。

そして、落合はこれら2要因が孤独感の構造を明らかにするのに有効かどうかを、より客観的・実証的に検討した。その結果、「人間同志の理解・共感についての感じ方」「孤独への目のむけ方」の2要因ともに、孤独感の構造を明らかにするのに有効であることが分かった。ここで落合は、第2因子を「自己(人間)の個別性の自覚」としている。これは、「孤独への目のむけ方」という要因とニュアンスを異としている。これについて落合

は「項目の構造化の際の、孤独への目のむけ方という要因の中には、孤独への恐れと愛、および個別性の自覚という両要素が同程度含まれていた」と述べている。そして「前者は恐れをも愛をも、各人が持つダイナミックなものであるために、Q分類作業をする中で薄らぎ、一方後者は、スタティックな一貫したものであるためにQ分類においてより明確化されたのではないかと考えられる」と述べている。そして「もちろん、もう1つの原因としては分類項目作成上に、不適切な点があったのではないかということが考えられる」と述べている。また、「いずれにせよ、自己の個性に気づき、それを受け入れることができるかどうか、孤独感を規定していることは今までの青年心理学においては明確に指摘されていなかったことである。この点から見ると、青年の孤独感を理解するための新しい視点が見いだされたように思われる。しかし、これについては今後更に検討する必要がある」という言葉で締められている。

上記の結果より、落合(1978)は、青年期の孤独感是对他的次元(人間同士共感・理解についての感じ方)、対自的次元(人間の個性の自覚)の2次元構造であり、4類型に分類可能とした。これら4類型が、孤独感の代表的な類型であることを落合は図1のように表わしている。



図一 落合による孤独感の類型

4つの孤独感は以下のように説明されている。

- A型：他者との情緒的、依存的融合状態の中にいる。孤独に対して否定的なイメージを持っているため、孤独感を感じないようにしている。孤独感を感じるのは客観的、空間的に見て分かる孤立状態に置かれたときである。
- B型：理解者の欠如態としての孤独感。理想的理解者を追求している。自己の内面を見つめ、自己改革の努力をしているが、自分の個性に気づいていないため、自分が高い価値を置くものが、自分を理解してくれる人にとっても価値があるものかどうか問うことなくされている。そのため、独り相撲の感がある。

C型：他者からの隔絶、無関心。「人は元来ひとりぼっち」と感じ、考え、自分ともともと同一の人はいないのだから、自分を理解してくれる人を求めることは不可能であって、無駄と諦めたものの孤独感。

D型：人間は本来独自性を持つ存在であり、自分に誰も変わることはできないのだということ意識しており、運命的諦観によって孤独感を感じることもある。だからといって自分は自分、他人は他人で生活していれば良いと考えているのではなく、むしろ逆に、人との触れ合い、連帯を大事にしているものが感じている孤独感。この型の孤独感を一言で言えば、人間の代替不可能性の自覚と出会いへの志向を特徴とした孤独感で、Moustakas(1961)のいう実存的孤独感とも言える。

落合(1983a)は孤独感の構造として解明された2つの次元の強さを測定することで、孤独感の類型を判別できると考え、孤独感類型尺度(Loneliness Scale by Ochiai:以下LSO)を作成した。落合(1981)はこのLSOをもちいて、A、B、C、Dのそれぞれのタイプの孤独感を感じている人が抱えているイメージを調査した。その結果、A型は「むなしい、暗い、嫌な」、B型は「むなしい、暗い、緊張する」、C型は「むなしい、緊張する、成熟した」、D型は「明るい、好ましい、充実している、成熟した」イメージを持っていることが分かった。つまり、A型、B型、C型の孤独感是否定的イメージの孤独感を表わしており、D型の孤独感肯定的イメージの孤独感を表わしていると言える。

また、落合(1983b)は孤独感の類型上の発達の变化についての調査も行なった。個人間比較により、青年期前期から後期にかけて孤独感の型はA型からD型へ移行することが示された。加えて対自的次元(人間の個性の自覚)が現れるのは、青年期中期以降であるという結果が見いだされている。これは、対自的次元(人間の個性の自覚)が自我の発達にともない、必然的に感じるものであることを示している。つまり対自的次元(人間の個性の自覚)の出現は人格の成熟の指標の1つとなることが示された。

さらに落合(1984)は孤独感を人格形成という観点からの見直しも行ない、孤独感が青年の人格形成上、肯定的な意味を持つ場合があるとしている。その場合とは「個性を深く自覚し、人と理解・共感することは難しいと感じながらも、理解・共感しようとする事」である。この段階の認識にいたると、孤独が人格形成に有意義に作用し、この段階にいたってない場合には孤独感を

じることがかえって人格形成に否定的な影響を与えるとした。

2. 目的と仮説

青年期の孤独感を構成するのは対他的次元（人間同士共感・理解できる）と対自的次元（人間の個別性の自覚）であり、青年期中期に現れる対自的次元（人間の個別性の自覚）は人格の成熟の指標の1つと考えられている。

ここで1つめの疑問が生じる。「人間の個別性の自覚」ができていないというのは、自我の発見ができておらず、「自分」と「他者」の区別がついていない状態であると考えられる。これは、どこまでが「自分の思い・考え」でどこからかが「他者の思い・考え」という境界が曖昧になり、「人間同士理解・共感できる」という個としての「自分」と別の個である「他者」との関わりによる理解・共感はできないものと考えられる。つまり、他者の全てが分かったような思い込み・幻想を抱いたり、逆に他者が全く何を考えているか分からないという思い込み・幻想を抱くのではないかと考えられる。このことから「人間同士理解・共感できる」という思いは、「人間の個別性の自覚」の現れによってその質が変化するのではないかという疑問を持った。

この疑問に基づいて後藤（2001）は、精神分析理論の Klein 派対象関係理論を用い、自我発達の視点からの検討を行なった。これによると「A、B型は妄想-分裂態勢の自我状態」と考えられ、「自他の区別が曖昧で、投影によって対象を幻想している」と考えられた。また「C、D型は抑うつ態勢の自我状態」であり、「自他の区別ができ、他者は1つの統合された全体像として知覚されている」とし、「その他者と理解・共感できる」あるいは「理解・共感できないと感じる」と考えた。そして「『人間の個別性の自覚』の出現による『人間同士理解・共感できる』という思いは『幻想』から『現実』へ発達すると考えられる」としている。

上記の結果から、A、B型からC、D型へ孤独感類型は発達を遂げる事が分かった。2つめの疑問としてこれらの4つ孤独感類型は、どのように発達していくのかという疑問が生じる。先行研究で述べたように落合は実証的な検討を行っているが、自我発達の視点から理論的に検討はされていない。そのため後藤（2001）は孤独感の4類型の発達を、同じく Klein 派対象関係理論を用いて自我発達の視点からの検討を行った。以下にその検討結果を述べる。

A型：妄想-分裂態勢における「良い対象」と部分対象関係を結んでいる。生の本能を対象に投影し、理想化された対象を幻想している状態。

B型：妄想-分裂態勢における「悪い対象」と部分対象関係を結んでいる。死の本能を対象に投影し、迫害的对象を幻想している状態。

C型：抑うつ態勢における全体対象関係を結んでいる。対象への両価性をめぐる葛藤から生じる抑うつ不安を感じていると思われる。つまり「良い対象」を自分自身の口愛的な破壊衝動のために失ってしまったという幻想による感覚から生じる悲哀、思慕の情、罪悪感を感じている状態と思われる。

D型：抑うつ態勢での償いの試みに関連があると思われる。悲哀と償いを繰り返すことによって「良い対象」を保持する自分の能力、ひいては自己の愛情の能力に自信を持つようになっていく。万能感に根差した対象の支配を捨てて、ありのままに関わることを学ぶようになっていく状態と思われる。

このことから「孤独感とはA型とB型を揺れ動き、A型がB型よりも強いものであると感じられることによって、C型、そしてD型へ発達すること」が示唆された。

上記の検討結果から後藤（2001）は落合の孤独感類型を再解釈をし以下のように定義づけた。

I型（落合A型）：投影が盛んで「自分」と「他者」の境界が曖昧になっている。「他者」に生の本能を投影し、理想化された対象を幻想しており、人間同士理解・共感できるという幻想を抱いている。そのため孤独感を感じる事が少ない。

II型（落合B型）：投影が盛んで、「自分」と「他者」の境界が曖昧になっている。「他者」に死の本能を投影し、迫害的对象を幻想している。人間同士理解・共感できないという幻想を抱き、孤独感を感じている。

III型（落合C型）：自分と他者は別個の存在であるという認識を持っている。自分を理解・共感してくれる人を、なくしてしまったという思いから「自分は独りぼっち」であると感じ、孤独感を抱いている。

IV型（落合D型）：「自分」と「他者」が別個の存在であるという認識を持っている。「自分」も「他者」も個別性を持っているから、全てを理解・共感できるわけではないというところから派生する孤独感を抱いている。同時にその孤独感が当然であるという自覚があり、それでも理解・共感しようと努めることができる。

以上のように、後藤（2001）は理論的に孤独感類型の発達を検討した。

さて、青年期が孤独感に浸りつつ、じっくりと自分を

見つめて自我同一性（アイデンティティ）を模索していくことは、発達心理学、青年心理学の立場から強調されている。小此木（1979）は「最終的には自分の孤独に耐え、その孤独に居直ったところから人生を続けるしかないことを我々は悟らなければならない。そしてそのような意味での孤独体験こそ、自我の自律の原体験である」と述べている。つまり、孤独感に耐え、抱え続けることにより「自分」と「他者」は明確に分離され、自分の存在を意識することになり、自我が発見されると考えられる。また、落合（1979）は「自分の内面を見つめ、自我の目覚めが起こり、個別性に気づいていく」と述べている。

このように孤独感を抱えることは自我を発見するにあたり避けえないものであると言えよう。

次に、自我の発見により青年の自我意識は高揚し、青年期の課題である自我同一性（アイデンティティ）の意識が芽生えていくと考えられる。Erikson（1973）は自我同一性（アイデンティティ）を主観的には次のような事実の目覚めであるとした。①自己の斉一性（この自分は紛れもなく独自で固有な自分であって、いかなる状況においても同じその人であると他者からも認められ、自分でも認めること）②時間的な連続性と一貫性（以前の自分も今の自分も一貫して同じ自分であると自覚すること）③帰属性（自分はなんらかの社会集団に所属し、そこに一体感を持つとともに、他の成員にも是認されていること）である。これらのことから自我同一性の意識から孤独感を検討することは有効であると考えられよう。

そこで本論文での目的は、自我同一性の意識の変化から見た孤独感の発達過程を実証的に検討することとした。

方法

1) 調査対象

4年制大学1、2回生231人（男子118人、女子113人）。平均年齢19.6才

2) 質問紙

a. 孤独感尺度（LSO）

16項目の質問紙である。孤独感を対他的次元（LSO-U）を表わす9項目、対自的次元（LSO-E）を表わす7項目の2軸により4類型に判別する。それぞれ5件法で実施される。

b. 自我同一性尺度（EIS）

自我同一性の測定論的研究であるが、これは1967年の村瀬らによって始められた。その後、砂田（1979）が同一性混乱尺度を作成した。これは自我の規範と家族の規

範のずれ、大学の規範のずれ、世間との規範のずれを調査するものであった。1981年、宮下らはRasmussen（1961）の同一性尺度を翻訳した。この尺度はEriksonの心理・社会的発達段階の最初の6段階、すなわち、乳児期から成人前期にいたる各発達段階について、それぞれの発達の危機をどの程度解決しているかによって同一性を判定する尺度である。

本研究では、対他的次元、対自的次元から構成される孤独感と、自我同一性の意識を調査するものである。そのため、人間関係を通して自我を形成していく側面から自我同一性を見る方向性を持った尺度を選択した。これは水野（1982）によって作成された自我同一性尺度（Ego Identity Scale：以下EIS）である。40項目の質問紙であり、7件法で実施される。

水野は、Erikson（1968）のいう同一性の以下の2つの主観的自覚に注目している。

1. 自分自身のあり方に関する自我確立。各自の個性的なあり方の様式ともいえる自我の統合方法に普遍性と連続性がある。
2. 他者との関わりに関する社会性確立。個人のあり方の様式が身近にいる重要な他者に受け入れられている自己の普遍性と連続性とに一致する。

それぞれの尺度の項目例を表1に示す。

表一 各尺度の項目内容の例

尺度名	
LSO-U	・人間は他人の喜びや悩みを一緒に味わうことができる ・私は、私の生き方を誰かが理解してくれると信じている
LSO-E	・結局、自分は一人でしかないと思う ・どんなに親しい人も、結局自分とは別個の人間であると思う
EIS	・自分のしたいことが何であるか分からない ・他の人のように幸せだと良いなとよく感じる

3) 調査手続き

一般教養の講義の時間などの集団場面において質問紙を配布、実施、回収した。一部は、個人に配布、自宅に記入の後回収した。なお、調査は無記名で行なった。

結果

1) LSOによる孤独感の信頼性

LSOにおける下位項目の内部整合性を確かめるために、下位項目ごとにCronbachの α 係数を算出した。これら下位項目の内部整合性的信頼性は確保されたと言え

よう。表2に下位項目ごとの平均値と標準偏差値、 α 係数を示す。

表-2 下位項目ごとの平均値と標準偏差、 α 係数

	N	Mean	S. D.	α
LSO-U	231	8.70	6.28	0.83
LSO-E	231	2.52	5.39	0.70

2) 孤独感の分類

2つの下位項目 (LSO-U,LSO-E) の少なくとも1項目の得点が0点の場合、分類不可能となるためその他の欄に分類し、表3に示す。

表-3 孤独感の分類結果

	I	II	III	IV	その他	合計
男性	37	1	13	58	9	118
女性	34	0	5	65	9	113
合計	71	1	18	123	18	231

その結果、II型の孤独感は1人しかおらず、統計的分析が不可能であると判断した。そのため本研究ではII型は分析から削除した。また、孤独感の4類型について性別による有意差があるか χ^2 検定を行なった。その結果、性別による類型に有意差は見られなかった ($\chi^2=3.08$, $df=3$)。

3) 孤独感の類型と自我同一性意識との関連

E I S の内部整合性的信頼性を確かめるためにCronbachの α 係数を算出したところ $\alpha=0.89$ となり信頼性は確保された。E I S得点の平均は169.54 標準偏差は24.25であった。次に3つの孤独感類型別によるE I S得点の平均値と標準偏差値を表4に示す。

表-4 孤独感類型別におけるEIS得点の平均値と標準偏差

孤独感類型	E I S 得点	
I	Mean	174.70
	SD	20.88
III	Mean	155.78
	SD	34.25
IV	Mean	168.91
	SD	23.51

4) 孤独感類型別におけるE I S得点の性差

孤独感類型におけるE I S得点の性差を比較するためにt検定を行なった。結果は表5の通りである。

表-5 孤独感類型別におけるEIS得点の性差

	男性 (N=108)		女性 (N=104)		t
	Mean	SD	Mean	SD	
I	174.03	24.42	175.44	16.52	0.48 ns
III	165.38	30.66	130.80	32.97	7.69 ***
IV	166.02	24.66	171.49	22.30	1.67 +

***:P<0.001 +:P<0.1 ns:有意なし

III型の孤独感を持つ人のE I S得点のは女性の方が男性よりも有意に低かった。

5) 孤独感類型とE I S得点との関連

3つの孤独感類型とE I S得点を比較するために、一元配置分散分析を行なった ($F=4.74$, $df=209$, $p<0.01$)。さらにTukey法によって多重比較を行なった。その結果、I型、IV型のほうが、III型よりもE I S得点が高かった。

6) 2つの孤独感類型I型、IV型とE I S得点の比較

4)より、3つの孤独感類型におけるE I S得点では、I型、IV型 ほうが、III型よりもE I S得点が高いという結果となった。そこで、ここでは人間の個性性の自覚の現れによって起こる人間同士理解・共感できるという意識の質の変化とE I S得点を比較するために、I型とIV型のE I S得点のt検定を行なった。結果は表6の通りである。

表-6 孤独感類型I型、IV型のEIS得点の比較

I N=71		IV N=123		t	P
Mean	SD	Mean	SD		
174.70	20.88	168.97	23.51	1.72	0.07 +

+ :P<0.1

傾向としてはあるが、I型のほうがIV型よりもE I S得点が高かった。

考察

孤独感のI型、III型、IV型のE I S得点を比較するために一元配置分散分析をおこなったところ、III型よりも

I型、IV型の自我同一性得点が有意に高かった。つまり、I型、IV型はともにⅢ型よりも自我同一性意識が高かった。また、I型とIV型のEIS得点の比較をするためにt検定を行なった。その結果、I型の方がIV型よりも傾向としてはあるが、EIS得点が高かった。つまりI型の方がIV型よりも傾向としてはあるが、自我同一性意識が高かった。これらの結果について以下のように考察した。

I型は「自分」と「他者」の境界が曖昧であり、自我の発見がなされていないにもかかわらず、自我同一性の意識が高いと一見矛盾した結果が得られた。後藤(2001)はI型を「理想化された対象を幻想している」状態であると述べた。つまり理想化された「良い対象」である他者と融合した自我状態で自我同一性を確立していると思われる。また「自分」と「他者」の境界が曖昧で、人間同士理解・共感できるという幻想を持っていることから、他者との同一化の機制も強くなると考えられる。そのため特定の社会集団に一時的に同一化することによってあたかも自我同一性が確立したかのように見える「仮の同一性」(福島、1976)が確立している状態であると思われる。またErikson(1959)は「たとえどのような同一化群がいくら積み重ねられようとも一個のパーソナリティーの動きをもたらすことはできない」と述べ、「同一性形成は同一化の有効性が終わることから始まる」と述べている。以上のことから、I型は自我同一性意識は高いが、それは「理想的他者との融合」や「特定の社会集団への一時的同一化による仮の同一性」であり、自我同一性を確立した状態とは異なると推測される。

Ⅲ型は「自分」と「他者」の分離はできているが、理解・共感できる人がいないと感じている。理解・共感できる人がいないという心理状態は「個人にとっての主観的な感覚である内面的連帯感、自らの同一性を揺るぎないものにするための重要な側面」(鏑,1983)であるというレベルに至っていないと考えられる。またErikson(1959)は自我同一性を確立する過程において「絶対に欠くことのできない支持を提供する」重要性を述べている。このように、Ⅲ型は自我同一性を確立する上で必要な「この自分は周りから受け入れられている、支持されている」という意識が持ちにくいと推測され、自我同一性意識が低いのではないかと考えられる。以上のことよりⅢ型は、同一性の危機の状態と思われる。

また、Ⅲ型のみ男女間の自我同一性得点に有意な差が見られた。Hodgson and Fisher(1979)は「女性の自我同一性は、周りの人と調和できるかどうかということが重要である」と述べている。また、Eriksonは「女性

の自我同一性形成が親密なパートナーシップが確立されるあいだまで不完全なままに留まる」ということを指摘している。そのため、理解・共感できる人がいないという意識状態は、男性より女性の自我同一性意識に深く影響を与えるということが示唆されたといえる。

IV型は、「自我の発見がなされており、人間をそれぞれ別個な存在だと考えている。そのうえで、相互に理解し合おうという姿勢を持つ」とした。IV型は孤独感の4類型の中で1番成熟した人間が持っている孤独感と言える。しかしながら自我同一性得点をI型、IV型で比較した結果、I型の自我同一性意識がIV型の自我同一性意識よりも傾向として高かった。これは人格の成熟につれ「理想的他者との融合」「特定の社会集団への一時的な同一化」という状態から、「自分」と「他者」の分離ができ個別の自我同一性意識を持っているということが推測される。つまり理想的人物ではない、等身大の「自分」の自我同一性意識に収斂したということが推測される。また、Erikson(1959)によると「同一性の意識は、一度獲得されたら、そのまま保持されるわけではない」としている。そのため、IV型は人格的に成熟しても様々な課題、選択に対峙する度に、自分自身の内面を見つめ、不安や不確実感を感じると考えられる。そのためI型よりも自我同一性意識が低くなると考えられる。

以上のことから、自我同一性意識から見た孤独感の発達は、「理想的他者との融合」「仮の自我同一性」の確立の状態であるI型から、「自我同一性危機」の状態と思われるⅢ型を乗り越え、自我同一性の確立が高まっていると考えられるIV型に発達すると思われる。

またⅢ型の孤独感を乗り越え、IV型の成熟した孤独感を感じるためには、「この自分は回りから受け入れられている」という経験が必要であることが示唆された。

心理臨床という観点に立ち帰って上記の結果を考えると、自我同一性危機と思われるⅢ型の孤独感を抱いている人がクライエントとして登場した場合、基本的には援助者は共感的に話を聞くことが肝要であると思われる。I型の孤独感を抱いている人がクライエントとして登場した場合、援助者はクライエントがⅢ型の孤独感を抱けるようになることをひとまずの目標とすることが必要であると思われる。その過程ではクライエントの投げかけるさまざまな投影、感情に対して、援助者は「個」としての一貫した中立的態度をとる必要があると思われる。そのことにより、I型が持つ「良い幻想」は憤怒とともに崩れ去ると考えられるが、援助者は生き残らなければならない。それを繰り返すことにより、クライエントは少しずつ「自分」と「他者」との区別が付き、Ⅲ型へと移

行するのではないかとと思われる。

このように、孤独感の発達という観点からの心理援助の方法を事例を用いて詳細に検討することを今後の課題としたい。

引用文献

- Erikson, E.H.: Identity and the life cycle, New York, I.U.P. 1959 (小此木啓吾訳編 自我同一性 誠信書房 1973)
- 福島章：甘えと反抗の心理 日本経済新聞社 1976
- 後藤佳代子：青年期の孤独感に関する一考察—Klein 派対象関係理論による孤独感のとらえ直し—大阪市立大学児童・家庭相談所紀要、2001
- Hodgson, J.W., & Fisher, J.L.: Sex differences in identity and intimacy development in college youth. Journal of youth & Adolescence, 8, 37-50, 1979.
- Hollinworth, L.S.: The Psychology of the Adolescent, Appleton. 1928
- Jong-Gierveld, J.de.: The construct of loneliness, Components and measurement. Essence, 2, 221-238, 1978.
- Moustakas, C.E.: Lonliness, 1961 (吉永和子訳 孤独 岩崎学術出版 1972)
- 小此木啓吾：青年期の孤独 青年心理, 12, 16-28, 1979
- 落合良行：SCTによる青年の孤独感の分析 東京教育大学教育学部紀要 22, 3, 162-170 1976
- 落合良行：孤独感の4類型の特徴に関するSD法による解明 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 31, 131-140, 1981
- 落合良行：現代青年における孤独感の構造(Ⅱ) - その発達的变化の検討を中心にして - 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 33, 189-203, 1983a
- 落合良行：孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究 31, 332-336, 1983b.
- 落合良行・菅沼美保子：青年期における人格形成上での孤独感の否定的役割 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 34, 143-166, 1984.
- 落合良行：青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究 33, 1, 70-75, 1985.
- Paplaul, L.A. & Perlman, D. (Eds.): Lonliness, 1983 (加藤義明監訳 孤独感の心理学 誠信書房 1988)
- Spranger, E.: Psychologie des Jugendalters 1924 (原田茂訳 青年の心理 協同出版 1973)
- Storr, A.: SOLITUDE (The School of Genius) 1988 (森省二・吉野要監訳 孤独-自己への回帰- 創

元社 1994)

Sullivan, H.S.: The interpersonal theory of psychiatry New York, Norton, 1953

鐘幹八郎・山本力・宮下一博 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 1984

要約

本研究では、青年期後期の孤独感を4類型に判別し、それぞれの孤独感を抱く人の自我同一性意識を測定した。それぞれ類型の自我同一性意識の変化の過程から見た孤独感の発達を検討するものである。

方法として、孤独感を4類型に判別するには、落合(1983)の孤独感類型尺度(LSO)を使用した。また自我同一性意識の測定には、水野(1982)の自我同一性尺度(EIS)を使用した。被験者は231人の大学生であり、2つ一綴りになったこれらの質問紙を施行した。

Ⅱ型は一人であったため統計分析から削除した。そのため3つの孤独感類型のEIS得点の平均を比較するために、一元配置分散分析を行った。また3つの孤独感類型のEIS得点の平均、Ⅰ型とⅣ型のEIS得点の平均を比較するために、t検定を行った。

自我同一性意識の視点から孤独感の発達を見た結果、以下の点が示唆された。

- ①孤独感は、Ⅰ型からⅢ型へ、Ⅲ型からⅣ型に発達する。
- ②Ⅲ型を乗り越えるには「この自分は回りから受け入れられている」という経験が、特に女性には重要である。

Summary

The purpose of this study is to examine the relationship between the development of 4 loneliness types and their identity in late adolescence. Loneliness Scale by Ochiai (1983) was adopted to classify the loneliness into 4 types. And Mizuno's Ego Identity Scale (1982) was adopted to be its evaluation. Two hundred thirty-one university students were asked to write responses to both questionnaires. There is one person in type II, so it was excluded from the statistics. We examined the relationship between the development of 3 loneliness types and their identity.

From the viewpoint of identity, the result revealed as follows.

1, Type I develops into type III and type III develops into type IV.

2, What type III develops into type IV needs is the experience of acceptance, especially for women.